

誰でもが少々後ろめたいことがいくらかは あるでしょうから、「鬼」が現われたら、その恐ろしい形相に、どこかわからない異界に連れていかれそうに思うのでしょうか……。子どもたちは大層こわいようです。いくら『鬼滅』で見慣れているとはいえ、実際、年少の子が何れも不安な顔つきで「むそうようちえんのおにはこわいの？」と尋ねてきましたし、年長の子たちがこわい鬼のことを話しているのに出くわしたこともあります。起きていて時間に鬼の話をしたり、それらしい格好で登場されても流石に大人はこわくありませんが、夢の中でうなづかれたり脚をつかまれたりしたらうなされるかもしれません。起きていても例えば人里離れた古民家に宿泊している夜更けに突然鬼の姿で乱入されたり恐ろしいに違いありません。

先日、その鬼にまつわる話を新しい1年生(年長児)とお寺さんを訪れた拵に伺い、勉強になりました。

四天王が脚で踏みつけている邪鬼について質問をした子どもたちに対してのお話です。

「悪い鬼もいれば、いい鬼もいるかもしれないけれど、大切なことは人の心の中で悪い鬼を働かせてしまわないように過ぎないといけなと思う。心の中にある隙間に鬼がはいり込まないように、仏さまは守って下さっている」

問題は、外にあるのではなく、いつでも自分自身の在りようということなのです。

ということには、さらに、鬼は人が自らを保ってられるように、気持ちやそれないうちは、恐ろしい顔までして導いてくれているという訳なのです。ありがたい ありがたいことです。

最近の世界情勢を見るにつけ、紛争やテロリズム、国家間や民族間の軋制……と、かなり危うい状態です。

そして コロナ感染によるおかしきれない目の前の危機を打開するという目的の中で、世界の至る所で国家主義がどんどん強まっているのを感じさせられます。

鬼たちが、人間たちの行為、その人間性の欠如を見て、恐ろしがっているかもしれません。

私たちは、

日々流されることなく立ち止まって、今一度一人ひとりとしてどうあったらいいのか、どうなりたいと願っているのか、自らの心に尋ねる必要がある気がします。時代の矛盾と不条理の中で、どうしたらうまく生き抜いていけるかを考え行動することも大切ですが、本当に何を願っているのか、どう生きたいのかを問い、まさしく「私」として能動的に生きることを、そして願っている社会の未来を、「私」を出発点として求め続けたいといけないうちの思いです。

新しい春を迎える今、日々刻々 そのことを思い巡らしています。